地質ニュース529号，6頁，1998年9月
Chishitsu News no.529, p.6, September, 1998

私の地質事始め

有 田 正 史[1)]

私が地質屋になった遠因は明治の後期に広島県の山奥の旧家で庄屋の一人息子であった祖父が隣村で塾を開いていた学者の娘さんと駆け落ちしたことにあるのであろう．当然のことながら，勘当となり，その旧家は養子と養女が継ぎ，祖父は還る家を失った．呉の町に出たものの，庄屋の若旦那には生活能力はなかったようである．そこで祖父は家族を連れて韓国に渡ったが経済的状況は改善されなかったようである．

私は祖父の末っ子である父の長男として生まれた．第二次世界大戦が終了したのは私が5歳の時である．広島には帰れないので，母の郷里である山口県の萩に引き上げた．父は表具師であったが，戦後の混乱期にそんな仕事があるわけはない．この当時，家付きで給料が保証されているのは炭鉱であった．父は山口県の大嶺(おおみね)炭田で炭鉱夫として職を得た．大嶺炭田は三畳紀の無煙炭の産地として知られている所である．無煙炭は当時の軍艦には必需品で大嶺炭田は戦前は海軍省直轄の炭鉱であった．

戦後の復興に必要なエネルギー資源の供給振興策のために炭鉱は好景気であった．大臣が来て「諸君は地下の戦士である」と言ったのは，この当時の話である．しかしながら，炭鉱の閉山にともない，現在のこの地に昔の繁栄と熱気をうかがい知ることはできない．

小学3年の時だと記憶するが，学校の近くの谷を塞き止めて水源池を作る工事の際に大量の珪化木が風化した砂岩層から産出したことを知り，毎日工事現場に採集に出かけた．これが化石少年になったきっかけである．大嶺炭田地域は海成層と陸成層があり，貝化石や植物化石の宝庫で，石を割れば必ず化石が出るといっても過言でない場所である．大嶺炭田は東側の二畳紀のフズリナ，ウミユリ，サンゴを含む石灰岩と西側のジュラ紀のアンモナイトを産出する頁岩層に挟まれている．中学生になると日曜日には，あんぱんを腰に，大工用の金鎚とカスガイを引き伸ばした自作のタガネを持って立派な標本を求め，西へ東へ二里，三里と友達と徒歩で遠征した．

これだけなら単なる化石好きの少年で終わったであろうと思われる．この当時，東京大学の大学院に在学しておられた徳山 明先生が三畳紀の貝化石の研究しに来ておられ，度々調査も一緒させていただき，化石研究の初歩を教えていただくことができたのは幸いであった．化石の種名は忘れたが，属名は今でも覚えている．もう一人の先生との出会いも私の地質屋への道に大きく影響を与えている．この方は内藤源太朗先生で高校時代の恩師である．この先生は大変無欲な方で植物化石の研究一筋の人で私の研究者像に強い影響を与えている．私も植物化石の研究者になろうと思ったものである．私の母は化石集めばかりしている息子の将来を心配して「化石の研究でご飯が食べていけるもんでしょうか」と先生を訪ねたそうである．先生は「よくはわからないが，地質の好きな人に悪い人はいない」と答えたそうである．母はどのように理解したか知らないが，地質の道に進むことを反対しなくなった．これが私の地質事始めの顛末である．

戦後の復興期には道路沿いに多くの露頭があり，その気になれば地質学のロマンの世界にのめり込める空間がどこにでも広がっていた．私の少年時代を振り返って見て，現在では，身近に地質学への興味を持たせる自然環境がなくなっていることに驚かされる．交通頻繁な道路沿いの露頭がコンクリートで隠されるのは安全上仕方がないことであろう．そうであるならば，子供達に地質を理解させるために，各県や町の青少年の家などの研修施設の近くの山をブルドーザーで切り開き一筋の地質への道を開設するなどの提言が次世代の地質屋を育てるために必要ではないかと考えている．

1) 地質調査所 統括研究調査官